

調査報告

ロマンス言語学の論点—ある調査報告より (2) Aspetti problematici della linguistica romanza A proposito di alcune recenti indagini (2)

菅田 茂昭
Shigeaki SUGETA

1. ロマンス語における語彙化の論点

第30回イタリア言語学会国際大会(パヴィア大学、1996年9月26日-28日)における第1日目の午前中の全体会議の中で標題のテーマで発表し、「文法化の一方向性が近年論じられているが、記号の恣意性における二つの秩序——絶対的なものと相対的なもの——の存在を考慮する立場から、文法化に対し語彙化を対等に再認識すべきである」と主張した(cfr. S. Sugeta, *Aspetti problematici della lessicalizzazione nelle lingue romanze*. In: P. Ramat, E. Roma (a c. di), 1998, *Sintassi storica* = Atti del XXX Congresso, SLI39, Roma, Bulzoni)。大会運営委員長P. Ramat 教授のほか、T. De Mauro 教授、R. Renzi 教授などからの賛同を得ることができ、参加者の中からは興味ある例を補充までしていただいた。

CANTARE + HABEO > sp. *cantaré* (*cantar*「歌う」の直説法未来形1人称・単数)型の変化は、A. Meillet によりすでに文法化(grammaticalizzazione)と命名されていたが、近年この現象が“Today's morphology is yesterday's syntax” (Givón) といった視点から改めて注目され、しかもその逆をなす脱文法化(degrammaticalizzazione)は稀であると説かれている。

しかしながら文法性と語彙性との均衡を保つ関係に置かれていることを考慮すれば、文法化の対極に脱文法化を置いてその一方向性を指摘する代りに語彙化を導入し、これに対等な価値を与えることで、むしろ文法化を正當に位置づけることにはならないだろうかという提案である。

語彙化の概念を再検討しようとする、Marouzeau など初期の言語学用語辞典には、文法化はあるが、語彙化という用語は見当たらない。しかも種類が増えた最近の辞典では語彙化は見出し語に加わったが、その用法は脱文法化を主体とするものから生成形態論におけるものまでさまざまである。

発表者は語彙化を以下の二つのタイプに分類する。

I. 脱文法化によるもの

この型の語彙化をP. Hopper(1993)は“*up* [前置詞]のようなnon-lexical formが完全にlexical item ([動詞] <価格など>を上げる)となる過程”と定義し、しかも“概して稀だが、実例は多くの言語

に見られる” (cfr. *Grammaticalization*, Cambridge University Press) としている。語源の研究で大抵指摘済みではあるが、古典的な例は、接辞>名詞: it. *-ismo* > *gli ismi* 「主義」; 前置詞>名詞: it. *pro, contro* > *pro e contro* 「賛否」; 屈折語尾>名詞: OMNIBUS > ing. *bus*, it. *autobus* などである。

II. 統辞的単位に由来するもの

(1) 統辞的連帯性(動機づけ)を失って絶対的恣意性をもつ語彙単位となる。

a. 音声変化により連帯性が消滅する場合(ソシュールが *agglutination* とよんでいる)

(例) INIMICUS > fr. *ennemi*, it. *nemico* 「敵」; UNDECIM > pg. *onze*, sp. *once*, fr. *onze* 「11」(cfr. it. *undici*); ECCU + ISTE > cat. *aquest*, it. *questo* 「これ」; HOC ILLE > fr. *oui* (cfr. pr. *oc* 「はい」); sp. *hijo de algo* > *hidalgo* 「郷土」

b. 意味変化により連帯性が消滅する場合

fr. *tout à fait* = *complètement* 「まったく」; fr. *sur-le-champ* = *tout de suite* 「すぐに」; sp. *sin embargo* = *todavía* 「しかしながら、それでも」

(2) 統辞的連帯性を完全には失わず相対的恣意性を保つ語彙単位となる。

a. 前項の(1)を除くすべての派生語・内心構造の合成語

語形成の初段階は文法的動機づけを前提としており、相対的恣意性を留める限り絶対的恣意性をもつ語彙単位の候補といえる。

it. *lessico* 「語彙」 > *lessicale* 「語彙の」, *lessicalità* 「語彙性」, *lessicalizzare* 「語彙化する」, *lessicalizzazione* 「語彙化」; it. *bambino* 「子供」 > *bambineggiare* 「子供っぽく振舞う」; it. *carta* 「紙」 + *moneta* 「貨幣」 > *cartamoneta* 「紙幣」; sp. *decir* 「言う」 > *contradecir* 「反対する」; sp. *pensión* 「年金」 > *pensionista* 「年金受給者」

b. 統辞的単位+接辞

ことに生成形態論においては、it. *press'a poco* 「およそ」のような統辞的単位に接尾辞 *-ismo* が加わって *pressapochismo* 「大まかな方式」が形成されるとき、元の統辞的単位の語彙化が論証される。fr. *jusqu'au bout* 「末端まで」 > *jusqu'au-boutisme* 「徹底主義」, it. *cento metri* 「100メートル」 > *centometrasta* 「100メートル競走選手」; sp. *cuenta corriente* 「当座預金」 > *cuentacorrentista* 「当座預金者」(なお、英語では *cut down* 「消滅する」 > *cut-downness* 「費用削減」, *with it* 「流行に通じている」 > *with-itness* 「流行に通じていること」などには語彙化が認められるが、*cut off* 「切り離す」, *without-it* 「流行に通じていない」には接尾辞 *-ness* の付加が不可であることから語彙化を認めていない)。

c. 外心構造の合成語

中心語（伝統的な用法による）を合成語の外にもつ、いわゆる外心構造の合成語は、そのなかで動機づけが透明である場合でも省略された中心語を前提とする点で語彙化を経ている。

it. *capinera*, srd. *conchinigheddu* 「黒い頭 [をもつ鳥] >ズグロムシクイ」, it. *pettirosso* 「赤い胸 [をもつ鳥] >コマドリ」, *millefoglie* 「千の葉 [からなるケーキ] >ミルフィーユ」, *tavola rotonda* 「円卓>円卓会議」; fr. *une quatre places* 「4座席>4人乗りの乗用車」; pg. *amor-perfeito* 「完全な愛>パンジー」; it. *non ti scordar di me* 「ワスレナグサ」など。このタイプの合成語はメトニミー的（シンタグマティック）およびメタファー的（パラディグマティック）な動機づけを共有していることに注目しておきたい。V+N型の合成語も例えば it. *lavare* 「洗う」+*piatti* 「皿」>*lavapiatti* 「皿洗い機」; sp. *abrir* 「開ける」+*latas* 「缶」>*abrelatas* 「缶切り」のように外心構造の合成語と見做すことができる。ここでは合成語の動詞が直説法3人称単数形、語幹、命令形のいずれに由来するかは問わない。

d. 頭字語

略号としての頭字語も統辞単位の意味内容をアイコン的に表わしていると解釈しておきたい。

it. FS < Ferrovie dello Stato 「国鉄」, fr. SNCF < Société nationale des chemins de fer français 「フランス国鉄」, sp. RENFE < Red nacional de Ferrocarriles Españoles 「スペイン国鉄」, it. GISCEL < Gruppo di Intervento e Studio nel Campo dell'Educazione Linguistica 「言語教育研究発表協会」, fr. SLR < Société de Linguistique Romane 「ロマンス言語学会」など。

語彙化を以上のように二つのタイプに分類したが、いずれのタイプであれ文法性の歴史的な弱化と解され、文法的な動機づけの存在（相対的恣意性）から語彙的な動機づけの欠如（絶対的恣意性）への段階的移行と見做すことができる。しかしながら文法化の命名者である A. Meillet もドイツ語の *heute* 「今日」< *hiu tagu* 「この日」を語彙化と呼ばず、文法化の例として挙げている。ロマンス語における PER HOC > it. *però* 「しかし」はいずれに属するのであろうか？機能語の場合には、あるいは両者の中立化、インターフェースが存在するのかも知れない。文法化と語彙化との間には語彙の相対的恣意性と絶対的恣意性との往来があるといえる。

さいごにソシュールのことば「同一言語の内部にあつては、すべて進化の運動は、これを有縁から恣意へ、恣意から有縁への連続的移行をもってしるすことができる」（小林英夫訳『一般言語学講義』P. 185）を引用させていただきたい。

2. ロマンズ語における合成語の拡張傾向

ロマンス語の語形成は、伝統的な派生語に対して合成語の割合がいかにかに低いかかが W. Meyer-Lübke の『ロマンス語文法』のなかで派生語の 191 頁に対し、合成語はわずか 4 頁であることにもみられる。しかしながら発表者はこれまでの、および第 23 回国際ロマンス言語学会（於サラマンカ大学、2001 年 9 月 24 日-30 日）における標題のテーマの発表にもとづき、ことに 20 世紀後半から合成語（it. *romanzo fiume* 「大河小説」、*portaombrelli* 「傘立て」など）の占める割合が絶えず増大しつつあることを、しかもイタリア語には先駆的ともいえる面があることも指摘したい（cfr. S. Sugeta, *La composizione: una tendenza in espansione nelle lingue romanze* In: F. Sánchez Miret (ed.) 2003, *Actas del XXIII Congreso Internacional de Lingüística y Filología Románica*, Tübingen, Max Niemeyer.）。

まづ主要ロマンス語には次のような例が豊富にみられる。pg. *navio patrulha* 「巡視船」、*limpa-pratos* 「皿洗い機」；sp. *coche bomba* 「爆弾自動車」、*portacontenedores* 「コンテナ船」；fr. *oiseau-mouche* 「ハチドリ」；*porte-hélicoptères* 「ヘリ空母」；it. *donna soldato* 「女兵士」；*lustrascalpe* 「靴磨き」；rum. *om-broască* 「潜水夫」（cfr. ing. *frogman*）、*papă-lapte* 「赤ん坊」。

T. De Mauro (1999), *Grande Dizionario Italiano dell'Uso*, UTET のあとがきに記された統計によると、合成語と派生語の見出し語数はそれぞれ合計 35368 : 93303 であり、20 世紀のイタリア語のなかでは合成語が派生語に対して占める割合がいかにかに増大し、伝統的な両者の不均衡が大幅に是正されているかがうかがえる。

しかも合成語の形成においてその拡大に貢献しているのは [N+N]_N および [V+N]_N の二つのタイプである。A. Giurescu (1975) はあるイタリアの雑誌 (1968) を対象とした調査では合成語の 48% は N+N, 21.72% が V+N であり、N+Prep. +N の 19.08% を加えると全体の 88.8% がこの 2 つの型からなるという（cfr. *Les mots composés dans les langues romanes*, The Hague, Mouton）。この頻度はフランス語およびスペイン語でもほぼ同じと推定している。[V+N]_N 型の生産性の高い合成語のひとつとして *porta-* が注目される。発表者が T. De Mauro (2000), *Il dizionario della lingua italiana*, Torino, Paravia で調査したところ、約 140 の見出し語のうち 103 は 20 世紀に入ってからのものであり、しかもその 80% はさらに 20 世紀後半から使用されているものであった。

この二つのタイプの、ことに 20 世紀の後半以来の拡大ぶりについては S. Sugeta, 1989, *Il sintagma nominale del tipo «parola-chiave» in italiano e nelle lingue romanze*. In: F. Foresti et al. (a c. di.), *L'italiano tra le lingue romanze* (= SLI 27), Roma, Bulzoni および S. Sugeta, 1992, *I nomi composti «verbo+nome» in italiano moderno*. In: B. Moretti et al. (a c. di.), *Linee di tendenza dell'italiano contemporaneo* (= SLI 33), Roma, Bulzoni ほかでとり挙げている。その結果ロマンス語に関して次の点を指摘したい。

これらの生産的な二つのタイプはロマンス語に共通してみられるが、当然予想される翻訳借用を含め、どの程度対応（一致）するかを問えば、主要言語間に完全な一致がある程度存在している。

pg. *cidade-jardim*, sp. *ciudad-jardín*, cat. *ciutat-jardi*, fr. *cit -jardin*, it. *citt -giardino*, rum. *oraş gr din * 「庭園都市」

pg. *homem-r *, sp. *hombre-rana*, cat. *home-rana*, fr. *homme-grenouille*, it. *uomo-rana*, rum. *om broasc *. 「潜水夫」

pg. *linguas irm s*, sp. *lenguas hermanas*, cat. *lleng es g rmanes*, fr. *langues soeurs*, it. *lingue sorelle*, rum. *limbi surori*. 「姉妹語」

pg. *navio hospital*, sp. *barco -hospital*, cat. *vaixell-hospital*, fr. *navire h pital*, it. *nave ospedale*, rum. *nav  spital*. 「病院船」

pg. *vag o-restaurante*, sp. *coche restaurante*, cat. *vag  restaurant*, fr. *wagon restaurant*, it. *carrozza (vagone) ristorante*, rum. *vagon restaurant*. 「食堂車」

pg. *arranha-ceus*, sp. *rascacielos*, cat. *gratacels*, fr. *gratte-ciel*, it. *grattacielo*, rum. *zgr rie-nori*. 「摩天楼」

しかしながら完全な一致には限界があり、部分的にロマンス語の伝統的な統辞形式（普通体で示す）が容易に見られるのも事実である。

pg. *c o-pol cia*, sp. *perro polic a*, cat. *gos polic a*, fr. *chien policier*, it. *cane poliziotto*, rum. *c ine poli ist*. 「警察犬」

pg. *abelha mestra*, sp. *abeja reina*, cat. *abella reina*, fr. *reine des abeilles*, it. *ape regina*, rum. (*ma c *) 「女王蜂」

pg. *cor-de-laranja*, sp. *color naranja*, cat. *color taronja*, fr. *couleur orange*, it. *colore arancia*, rum. *culoarea portocalei*. 「オレンジ色」

pg. *porta-vos*, sp. *portavoz*, cat. *portaveu*, fr. *porte-parole*, it. *portavoce*, rum. *purt tor de cuv nt*. 「スポークスマン」

またときには、A. Giurescu の予想に反して合成語がイタリア語に限られ、その他のロマンス語では派生ほか伝統的な形式手段がみられ、この点ではイタリア語がすべてのロマンス語のなかでもっとも先駆的といえそうである。

pg. *confer ncia de imprensa*, sp. *rueda de prensa*, cat. *roda de prensa*, fr. *conf rence de presse*, it. *conferenza stampa*, rum. *conferin  de presa*. 「記者会見」

pg. *comb io de mercadoria*, sp. *tren de mercandias*, cat. *tren de c rrega*, fr. *train de marchandises* it. *treno merci*, rum. *tren de marf *. 「貨物列車」

pg. sp. cat. aspirador, fr. aspirateur, it. *aspirapolvere*, rum. aspirator. 「掃除機」
 ロマンズ語における合成語の増大は、たしかに派生と合成の伝統的な極度の不均衡の是正を裏付け
 る現象と考えられるが、それは同時に合成語の要素が担う孤立語的特性と派生辞の担う屈折語的特性
 との釣合いの新たな変動ととらえることもできる。

3. マジョルカ島カタルニア語のラテン語 IPSE に由来する定冠詞

主要ロマンス語や標準カタルニア語とも異なり、ラテン語 IPSE に由来する定冠詞をサルジニア語
 と同様に用いているマジョルカ島を2003年9月初め訪ねてみた。この島で用いられている定冠詞
 を数日の滞在中にサルジニア語と対照的に観察するためであった。パルマ・デ・マジョルカおよび中
 央部にあるインカという名の町内のバールにて定冠詞の用い方を教わることができた。持ち込んだ参
 考文献は J. Veny, 1998, *Els parlars catalans (Síntesi de dialectologia)*, Mallorca, Moll と
 M. W. Wheeler et al., 1999, *Catalan: A Comprehensive Grammar*, London, Routledge である。

さて、この形式は salat 方言 (カタルニア東部海岸地域) にまで分布しているが、マジョルカ島内
 では次のように示される。

	男性・単数	男性・複数	女性・単数	女性・複数
子音の前	es	es	sa	ses
母音の前	s'	es	s'	sas
前置詞 amb の後	so	sos	sa	ses
	cat. mall. <i>es pa</i>	<i>es pans</i>	「パン」	
		<i>s' estació</i>	<i>ses estacions</i>	「駅」



パルマ・デ・マジョルカ市内にて

これに対しサルジニア語 (ログドーロ方言) では次の形式をとる。

	男性・単数	男性・複数	女性・単数	女性・複数
子音の前	su	sos	sa	sas
母音の前	s'	sos	s'	sas
	srd. log. <i>su pane</i>	<i>sos panes</i>	「パン」	
	<i>sa domo</i>	<i>sas domos</i>	「家」	

ただしマジョルカ島カタルニア語には、時間の表現、*la una* 「1時」、*les quatre* 「4時」など、さらにユニークな概念をもつ語には、*el cel* 「空」、*la mar* 「海」のように ILLE に由来する形式が用いられるという特異な現象が生じているのは驚きであった。さらに、カタルニア語の人名冠詞 *en* は知られているが、この島では *ca* (= *casa* 「家」、cfr. fr. *chez*) と融合した形式 (*can Joan* など) もみられる。

序でながらサルジニア島のアルゲーロのカタルニア語には IPSE に由来する形式はみられないことも併せて報告させていただきたい。

付記：以上の調査研究に当たり、科研費および早稲田大学特定課題研究助成費をいただいたことに感謝します。

引用文献

- De Mauro Tullio, 1999, *Grande Dizionario Italiano dell'Uso*, Torino, UTET.
- De Mauro Tullio, 2000, *Il dizionario della lingua italiana*, Torino, Paravia.
- Giurescu A., 1975, *Les mots composés dans les langues romanes*, The Hague, Mouton.
- Hopper Paul J. and Tranggott Elizabeth Closs, 1993, *Grammaticalization*, Cambridge University Press.
- Meyer-Lübke Wilhelm, 1890-1906, *Grammaire des langues romanes*, Paris, Welter.
- Saussure Ferdinand de, 1972, *Cours de linguistique générale* [Édition critique préparée par Tullio De Mauro] Paris, Payot. (小林英夫訳、1972、一般言語学講義、岩波書店)
- Sugeta Shigeaki, 1989, *Il sintagma nominale del tipo «parola-chiave» in italiano e nelle lingue romanze*. In: F. Foresti et al. (a c. di.), *L'italiano tra le lingue romanze* (= SLI 27), Roma, Bulzoni.
- Sugeta Shigeaki, 1998, *Aspetti problematici della lessicalizzazione nelle lingue romanze*. In: P. Ramat, E. Roma (a c. di.), *Sintassi storica* = Atti del XXX Congresso, SLI39, Roma, Bulzoni.
- Sugeta Shigeaki, 1992, *I nomi composti «verbo+nome» in italiano moderno*. In: B. Moretti et al. (a c. di.), *Linee di tendenza dell'italiano contemporaneo* (= SLI 33), Roma, Bulzoni.

- Sugeta Shigeaki, 2003, *La composizione:una tendenza in espansione nelle lingue romanze*. In :
F. Sánchez Miret (ed.) *Actas del XXIII Congreso Internacional de Lingüística y Filología Románica*,
Tübingen, Max Niemeyer.
- Veny Joan, 1998, *Els parlars catalans (Síntesi de dialectologia)*, Mallorca, Moll.
- Wheeler Max W. and Dols Nicolau, 1999, *A Comprehensive Grammar*, London, Routledge.